

27. 評価規準

子供の思いやこだわりを大切にした自由な探求活動、表現活動を軸に展開する生活科では、一人一人の活動における成果は異なっていて当然です。そのため、学習集団の中に基準をおいた相対評価は馴染まず、また、客観的な到達基準を設定する到達度評価では成果を把握することはできません。つまり、子供の多様な活動を見取るために、評価規準を個人の外に求めず、本人自身の中に求めるという個人内評価の新しい評価観が必要になってくるのです。

評価規準とは

生活科では、子供の思いや願いを大切にする教科である。したがって一人一人の子供の活動を大切にしていくために、活動は多様化していく。また、活動の過程も子供によって異なってくる。このように生活科では、量的キジュン（評価基準）を設定して評価するのではなく、質的キジュン（評価規準）を設定して評価する必要がある（目標規準など）。

評価は目標の裏返しだと言われている。指導に生かす評価や子供を伸ばす評価を行うには、学習の過程において、一人一人の目標の実現状況を把握する必要がある。そのためには、指導目標を明確にするとともに、その実現の状況を捉える評価方法や評価規準などを具体的に設定する必要がある。

—— 実践から ——

自分の自慢のお店にお客さんを呼ぶために、準備を進めてきた子供がいます。いよいよ開店の日を迎えますが、このとき教師は次のような評価の計画を立てていました。

うまくいくかどうか不安になっていた〇子は、後半縫い物が上手になって友だちにも「いいなぁ」と言われ、自信がついてきたようだ。接客の様子から、その活動が納得のいくものになっているかを見取っていきたい。

多様な活動が予想される生活科だからこそ、個々に応じた評価規準を明確にもって対応していくのが大切なのです。